

高知工科大学教授 前・台湾運輸通信省副大臣

周禮良さんにご伺いました

CHOU
Lie-Liang

周禮良さん

聞き手

大内雅博
元編集委員[writer] 駒崎文男
[photo] 崔健三

社会基盤には、人びとの利便、安全、快適、そして幸福を考え、
発注者・受注者双方の「信任」に基づいた整備と運営が必要です。

2008年2月26日（月）
土木学会役員会議室

民間企業の効率とアイデアを生かす

周先生は台北地下鉄、台湾高速鐵路（新幹線）、そして高雄地下鉄と、台湾の鉄道建設プロジェクトの総責任者として多くの実績をあげられました。社会基盤をどう定義してどのように計画されてきたのでしょうか。

周——社会基盤には、人びとの利便、安全、快適を考える必要があります。加えて、人びとの幸福ということを考えられればもつといいと思っています。たとえばこれまでの地下鉄建設では、地下を掘って、構造物をつくり、駅ができたら地上は元に戻すだけでした。しかし用地を元の状態に戻すのではなく、都市計画を考えれば新しいまちが出来ます。地下鉄の建設は、まちをつくる良い機会となります。

周先生は、世界最大規模のBOT (Build-Operate-Transfer)方式を、新幹線建設に台湾で初めて導入されました。続いて高雄地下鉄もBOTにより建設し、ともに最近営業開始または開業予定です。社会基盤整備におけるBOT導入の本質はなんでしょうか。

周——台湾では高速道路や地下鉄の建設は政府が行っていましたが、あまりうまくいきませんでした。BOT導入の本質は民間企業の高い経営効率とアイデアを社会基盤の整備と運営に生かすことです。台湾新幹線も高雄地下鉄についてもまだ断言はできませんが、私は80%は成功したと思っています。

欧米では民間協力事業PPP (Public-Private Partnership)が多く採用されています。このなかのPartnershipがBOTでは最も重要ですが、これを成り立たせているのが「信任」です。日本や以前の台湾のやり方は、発注者と受注者がいて、発注者のほうが上という考

え方です。PPPは対等な立場ですから、信任がなければパートナーシップは成り立ちません。

政府のやり方は、予算の範囲内で地下鉄や駅、トンネルをつくる、それだけです。一方、民間の場合は将来的に利用客を集めるためにまちづくりなども設計に取り入れます。高雄の場合にはまちをつくり、駅を「公共芸術」というアートにし、周りに新しい公園をつくりました。公園に人が集まるようになり、そのために地下鉄を利用する人も増えます。駅だけでなく、一緒に周りのまちも計画してつくる。政府に比べ、民間のほうが決断や実行が早いですし、そこがBOTの魅力です。

土木技術者の本当のボスは人民

——社会基盤の整備に際しての土木技術者の役割を教えてください。

周——土木技術者は人民の奉仕者であり、専



周 禮良(ツォウ・リーリャン)さん プロフィール

高知工科大学社会マネジメント研究所教授。1950年台北生まれ。58歳。国立成功大学卒業、アジア工科大学院修士課程修了、東京大学大学院博士課程修了、工学博士。台北市地下鉄建設局技師長、運輸通信省高速鐵路(新幹線)建設局副局長、高雄市地下鉄建設局長、運輸通信省副大臣を経て2007年より現職。前・土木学会台湾分会会長。

「専門家としてサービスを提供する立場にありません。土木技術者の本当のボスは人民であり、人民が欲しているものをつくらなければなりません。そして、土木技術者には正しい情報を人民に提供する義務があります。人民も正しい情報があれば判断することができます。たとえば高雄地下鉄の建設は、市民のサポートなしにはうまくいかなかったはずで、正しい情報を公開して、なぜそれが必要なのか、専門家として説明をし、人民の納得を得て行うことが大切です。」

——現在の台湾にとって日本の土木はどう位

置つけられていますか。

周——日本の土木の印象は、高い技術力と品質と信頼です。メイド・イン・ジャパンの製品と同様に世界中から評価されています。しかし、日本でつくられたものの品質がきわめて高いおかげで今までは必要がなかったのかもしれませんが、日本には「証明」の習慣がありませんでした。たとえば、公共事業の安全について台湾ではそれを証明するよう要請しています。これはいまや国際的な慣行です。日本の新幹線車両は台湾で歓迎されましたが、残念なことにはこの証明に時間を要したことが開業が遅れた原因の一つで

した。日本ではトライ&エラーを繰り返し、良いものをつくり上げていく習慣があります。そのため、安全を証明するための設計図や計算書を出すのに時間がかかりました。日本は自信があるからこそ相手に対して「Trust me」と言うことができるのですが、国際的な場ではやはりそれを証明するための書類が必要です。

日本で得た本質は知識ではなく、悟り

——周先生は東京大学に留学しコンクリート構造の研究で学位を取得されました。日本で受けた教育の本質はなんだったのでしょうか。

周——1980年から3年半、東京大学で学びました。帰国して公務員になり、日本で得た最先端の専門知識はプロジェクトの計画や設計審査に役立ちましたが、私が得た本質は知識ではなく、悟りでした。一つは「脳の働きの仕組みがわからなければ良い研究はできない」ということです。世の中はそれぞれの人間の脳がつくり出した世界に過ぎないことを悟り、発想が自由になりました。もう一つは博士論文を書いているときに「まだそのデータを使っているのか」と言われたことです。2年間かけて分析したデータでしたが、ときには固執せずに捨てることで進歩できるということを悟りました。恩師である岡村 甫先生からいただいたこの二つの言葉から私は悟り、問題を解決できるようにになりました。